

発行所 福島県中学校教育研究会国語部  
発行人 福島県中学校教育研究会国語部長  
発行 令和6年3月1日(金)

内 容	
○「思いから」…	… 1
○「評価」から見た授業改善	… 2
○ 令和6年度 中教研国語部研究の進め方	… 3～4

## 「思いから・・・」



県中教研研究協議会が参集型で行われた。実に4年ぶりのことである。コロナ禍にあっても中教研の灯を絶やさず、守り抜いてくださった会員の皆様に心から感謝してもしきれない思いが湧いてくる。

また、いわき支部では2年前から準備に取り組まれたとのこと。いわき支部の一致団結の底力を見た思いがする。感動である。これにもひたすら感謝である。

県大会当日、会場となったいわき市立平第一中学校では大会を成功させようと校長先生をはじめ、諸先生方が完全にバックアップ体制をとってくださった。また、会員の先生方からも実りある研究協議にしようという意気込みが感じられた。

そして、何よりも生徒たちの学びの姿を目の当たりにして、その健気な取組みに心を打たれた。これは、現場にいたからこそ味わえる醍醐味ではないか。もちろん、オンライン研修でも可能だが、「授業を現場で参観する」ことから得られるものは果てしなく大きいものだとつくづく感じた。

今年度、中教研は創立60周年を迎えた。記念誌が発行されたが、先達の文章の中に『授業を行う』『授業を参観する』という基本線だけは堅持していただければと思います。』というのがあった。授業づくりで鍛えられたことが教師力の向上につながるという先達の思いが強く伝わる内容である。

そう考えていくと、私たちは教材を前にして、何に心を動かされたのかという点が、とても大切になってくるのではないかと思うのである。

福島県中学校教育研究会国語部長 吉川 信夫

2年生の教科書(光村図書)に「言葉の力」(大岡信)という随筆がある。余計な言葉を極力省いた名文だが、その中に「言葉というものの本質が、口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである。」とある。この部分に私は深く考えさせられた。今のSNSによる発信を見てみると、言葉を軽く扱い発信するが、受信する側は言葉を重く受け止める傾向が強くなっているような気がしてならない。そこには、双方の表情が見えないことによる弊害が大きくなっているのを感じる。言葉の素晴らしさも恐ろしさも、人間性が大きくかかわっていることを、私たちは肝に銘じたい。

また、同じく3年生の教科書には「温かいスープ」(今道友信)という随筆が載っている。この作品も多くの示唆を与えてくれる。最後に筆者はこう述べている。「国際性、国際性とやかましく言われているが、その基本は、流れるような外国語の能力やきらびやかな学芸の才気や事業のスケールの大きさなのではない。それは、相手の立場を思いやる優しさ、お互いが人類の仲間であるという自覚なのである。」自らの生き方を問いただす内容である。私たちは、この文から何を学ぶべきなのか、様々に考えさせられる。正解はない。どう捉え、どう動くか・・・である。

材料がそろっていても調理をする側の捌き方次第で、素材が生きることもあれば逆のこともある。同じように、教材をどう見つめ、何を思うか。そんな私たちの力量を高めてくれるのは中教研でありたいと願う。そんな中教研を目指したい。

## 「評価」から見た授業改善

福島県教育庁義務教育課指導主事 松山 秀和

### はじめに

今年度の県大会は、4年ぶりの参集型で実施された。いわき市立平第一中学校で公開された3つの授業は、どれも練り上げられており、学び多き県大会であった。授業者の努力はもちろんのこと、いわき支部としての御尽力にも心より敬意を表したい。

さて、次年度の研究副主題は「国語における学びに向かう力の評価の工夫」とある。これまで2年間の研究で、「知識・技能」、「思考・判断・表現」における評価の理解は進んできたと推察するが、次年度は、これまでの研究を踏まえ、「指導と評価の一体化」について総括する1年になると考える。拙稿が今後の研究の一助となれば幸いである。

### 1 研究を進める前に

これまでを振り返ると、〔知識及び技能〕や〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域・指導事項を取り扱った指導技術の研究は、長年にわたり活発になされてきたが、評価については注目を集めることが少なかったように思う。指導と評価は切り離せないものであり、今回、評価についての研究がなされることは非常に価値がある。

まず、学習指導要領総則では、評価の実施に当たって配慮すべきことを以下のとおり示している。

- (1) 生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、**単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。**
- (2) **創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて生徒の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること。**

これを前提として、「国語における学びに向かう力の評価の工夫」について研究していくことになると思うが、学習指導要領では「学びに向かう力、人間性等」について、教科・学年の目標においてまとめて示しており、指導事項のまとまりごとには示していない。したがって、研究を進める上では、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【中学校国語】」を改めて熟読し、「学びに向かう力、人間性等」の評価の在り方について十分に理解しておくことが必要である。

### 2 「リアル」な研究を

詳細は「国語部研究の進め方」に委ねるが、「学びに向かう力、人間性等」には、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と、観点別評価や評定にはなじまず、個人内評価を通じて見取る部分がある。次

年度の研究の主となるであろう「主体的に学習に取り組む態度」については、**適切な評価規準、評価時期、評価方法**をしっかりと検討することが重要である。

検討する上でのキーワードは「リアル」である。たとえば、評価規準を次のように設定したとする。

積極的に登場人物の言動の意味などについて考え、学習課題に沿って考えたことを語り合おうとしている。

これをリアルに、観点別評価を通じて見取ろうとすると、次々と疑問が湧いてくる。

- ・実際に、どのような生徒の姿が確認できれば「おおむね満足できる」状況(B)と判断するのか。
- ・実際に、どのような言語活動を設定すれば「自らの学習の調整」を生徒に意識させることができるのか。
- ・実際に、どのように単元を構想し、指導するのか。
- ・実際に、何時間目に評価するのが適切なのか。
- ・実際に、何を評価材料とするのか。

これらの疑問に一つ一つ向き合い、最適解を見出していくことが、まさに評価の研究といえる。そして、**評価の研究を進めることによって、「指導と評価の一体化」に対する理解はさらに深まり、授業改善へとつながっていく。**蛇足だが、「実際に観点別評価を行うことを想定していない学習指導案」、「積極的に挙手したり話し合ったりすることを『主体的に学習に取り組む態度』と誤解した授業」などは確実に避けたい。

### 3 授業公開等で何を見せるか？何を見るか？

これまでのように、例えば「『思考力、判断力、表現力等』のB書くこと(1)ウ」と、領域・指導事項が明確な1時間の授業公開であれば、比較的授業者は見せやすく、参観者も見やすかった。しかし、「主体的に学習に取り組む態度」の評価についての授業公開となると、1時間の授業だけでは判断できないことが多くなると考えられる。

一例として、以下のことを授業者と参観者で共有することが考えられる。

【授業公開より前に】

- ・単元構想の意図
- ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価を第〇時に設定した理由
- ・本時における「粘り強さ」や「調整力」を発揮させる手立て

【事後研究会において】

- ・先行して同一授業を実施した学級の評価材料(記述等)

※本時の指導過程を話題にするだけでなく、評価材料を基に、実際にどのように評価するか協議する。

現研究主題最終年度として、各地区において素晴らしい研究実践がなされることを期待したい。

# 国語部研究の進め方

福島県中教研事務局

## 1 研究の進め方について

### (1) 研究主題・副主題について

#### 【研究主題】

言葉を用いて社会を見つめ、自ら関わろうとする姿勢を育み、思いや考えを伝え合う力を育成する指導はどうすればよいか。

#### 【副主題】

令和4年度

知識及び技能の定着を図り、それを活用するための指導の工夫

令和5年度

思考力、判断力、表現力等を育成する指導の工夫

令和6年度

国語における学びに向かう力の評価の工夫

研究主題の「言葉を用いて社会を見つめ、自ら関わろうとする姿勢を育み、思いや考えを伝え合う力を育成する指導」とは、日常生活から社会生活へと活動の場を広げる中学生が、言葉を通して社会の変化に気付いたり、言葉を用いて社会の変化に対応したりする力の育成を目指すことを表している。

令和6年度副主題は、「国語における学びに向かう力の評価の工夫」である。学習指導要領に示されている「学びに向かう力、人間性等」に関する教科の目標は、「言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。」である。

「言葉がもつ価値」とは、言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること、言葉を通じて人や社会と関わり、自他の存在について理解を深めることなどである。「言語感覚」とは、言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のことである。相手、目的や意図、場面や状況に応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直観的に判断したり、言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができるように指導していくことが大切である。また、「学びに向かう力、人間性等」は、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の育成を支えるものであり、これらを併せて育成を図ることが重要である。

今回の副主題は評価についてであるが、学習評価を行う際には、学習指導要領に示す目標との関連を密にして、指導と評価が一体となるように意識していく必要がある。評価の目的は、主に以下の二つである。

- ・生徒のよい点や進歩の状況を積極的に評価することで、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにする。
- ・教師が、指導のねらいに応じて生徒の学びを振り返ることにより、学習や指導の改善に役立てられるようにする。

また評価を行う際には、生徒の学習状況を記録に残す場面を精選し、単元全体を通した評価計画を立て、評価が適切に行われるようにすることが重要である。

### (2) 具体的な評価の方法について

「学びに向かう力、人間性等」の評価は、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価として見取ることができる部分と、「個人内評価」と

して見取る部分があることに留意する必要がある。個人内評価とは、生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するものであり、観点別学習状況の評価の対象外である。

一方、観点別学習状況の評価としてなされる「主体的に学習に取り組む態度」は、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、「自らの学習を調整しながら学ぼうとしているか」という意思的な側面を評価するものである。

本観点に基づく評価は、「主体的に学習に取り組む態度」に係る評価の観点の趣旨に照らして、

- ① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面
- ② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとしている側面

という二つの側面を評価することが求められる。学習の調整が知識及び技能の習得に結び付いていない場合には、教師が学習の進め方を適切に指導することが必要である。また、これら①②の姿は、実際の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられることから、実際の評価の場面においては、双方の側面を一体的に見取することも想定される。

評価にあたっては、生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面や他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面を設け、「主体的に学習に取り組む態度」を評価できるようにする必要がある。指導計画を作成する際には、「どのような場面で、特に粘り強さを発揮させたいか」また、「自らの学習の調整が必要となる場面はどこか」までを考えた上で、授業を構想していく必要がある。

具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や生徒による自己評価・相互評価等の状況を、評価の材料の一つとして用いることなどが考えられる。また、振り返りを評価に生かし、授業改善につなげるため、次のような内容を記述させるのも有効である。

- ・本時(本単元)の学習で意識したこと。
- ・本時(本単元)でできるようになったこと。
- ・本時(本単元)で課題解決のために試行錯誤したこと。
- ・前時までに学習したことで、本時の学習に役立ったこと。
- ・本時(本単元)で工夫しようとしたが十分ではなかったこと。
- ・本時(本単元)で学習したことで、今後の学習や生活の中で生かせそうなこと。

### (3) 令和6年度の研究の視点

#### 研究の視点

言葉を用いて社会を見つめ、自ら関わろうとする姿勢を育み、思いや考えを伝え合う力を身に付けさせるために、次のア～ウの視点から研究したい視点を選んで実践する。その際、授業者がどのような手立てで研究主題に迫るのかを必ず明確にする。

**ア** 資質・能力を身に付けるため、粘り強さを発揮し、自らの学習の調整を図る指導計画・評価計画・評価方法の工夫

**イ** 資質・能力を身に付けるため、粘り強さを発揮し、自らの学習の調整を図る課題設定の工夫

**ウ** 資質・能力を身に付けるため、粘り強さを発揮し、自らの学習の調整を図る言語活動の工夫

いずれの視点を選択する場合も、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』と『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【中学校国語】を参照して研究を進めたい。



#### (4) 具体的な評価の例について

学習指導要領の内容には、「学びに向かう力、人間性等」に係る指導事項は示されていない。ただし、資質・能力の三つの柱は相互に関連し合っているものであり、切り離して考えることはできない。そのため、当該単元で育成を目指す資質・能力と言語活動に応じた評価を作成する。作成にあたっては、(1)で示したように、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価できるようにする。その際、「特に粘り強い取組を発揮してほしい内容」と、「自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動」を考えながら設定していくことが重要である。なお、評価規準の文末は「～しようとしている。」とする。

#### 「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の設定の仕方

以下の①～④の内容を全て含め、単元の目標や学習内容に応じて、その組み合わせを工夫する。

- ① 粘り強く積極的に、進んで、粘り強く等)
- ② 自らの学習の調整(学習の見通しをもって、学習課題に沿って、今までの学習を生かして等)
- ③ 他の2観点において重点とする内容(特に、粘り強さを発揮してほしい内容)
- ④ 当該単元の具体的な言語活動(自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動)

【評価規準例】 積極的に古典に表れたものの方や考え方を知り、

① ③  
学習の見通しをもって自分の考えを説明しようとしている。  
② ④

#### 《実践例1》『枕草子』を読んで、清少納言と自分のものの方や考え方を比べ、考えたことを説明する授業(3時間)(評価方法の工夫)

- ① 「主体的に学習に取り組む態度」の評価設定  
本単元では、我が国の言語文化に興味をもち、自分に引き寄せて考えることに重点を置いている。そのため、『枕草子』の章段のいくつかを読むことを通じて、清少納言のものの方や考え方を知らうと試行錯誤する過程で、特に粘り強さを発揮させたいと考えた。また、自分の知識や経験を踏まえて、清少納言と自分のものの方や考え方を比べて考えたことを説明する活動の中で、自らの学習の進め方を調整できるようにしたいと考えた。
- ② 評価方法の工夫点  
単元の指導計画を作成する時点で、粘り強さを発揮させたい場面や学習の調整を必要とする場面を想定し、それに合わせて振り返りに書かせる項目を変えた。そうすることで、生徒の振り返りを適切な評価につなげられるようにした。
- ③ 実際の評価規準(主体的に学習に取り組む態度)  
積極的に古典に表れたものの方や考え方を知り、学習の見通しをもって自分の考えを説明しようとしている。
- ④ 授業における評価の実際  
②で示した評価規準の状況の評価するため、今回の単元では、生徒が「振り返りシート」に記述した内容と、教師が個々の生徒の学習状況を観察して分かったことを併用した。また、その日の授業のねらいや言語活動によって振り返りに記述させる内容を変更し、生徒たちが学習に対してどのように粘り強さを発揮したり調整を図ったりしているのかを、明確につかめるようにした。

時	学習活動	振り返りの項目
2	清少納言が「かわいらしいもの」と感じているものと、自分が感じているものとを比較しながら、清少納言のものの方や考え方について考える。	前時までに学習したことで、本時の学習に役立ったこと。
3	選んだ章段を読み、清少納言のものの方や考え方について、考えたことをグループで述べ合う。	本単元で課題を解決するために試行錯誤したこと。

第2時の振り返り項目をこのように設定したのは現時点での自らの学習状況を把握し、次の第3時の学習で学習課題を解決できるよう調整を促すためである。問われた内容について記述できていない生徒には、第1時で学

習した内容について確認するとともに、次時に向けて見直しをもって主体的に学習を進められるように指導した。第3時は単元最後の授業であるため、上記の内容について書かせた。生徒Xの記述には、「共通点と相違点をいくつか書き出したり友達に説明して意見を聞いたりした」とあり、積極的に学習課題について考えている様子が観察されたため、「おおむね満足できる」状況(B)と判断した。また、生徒Yは、「グループ以外の人意見を聞いたり、グループで選択した章段以外も読み、清少納言と自分のものの方や考え方を比べてみた」と書いており、「興味の広がり」「応用・活用の意識」が確認できたため、「十分満足できる」状況(A)と判断した。

#### 《実践例2》多様な読み手を想定し、新聞の投書を書く授業(5時間)(ウ・言語活動の工夫)

- ① 「主体的に学習に取り組む態度」の評価設定  
本単元では、目的や意図に応じた表現になっているかを確かめて、文章全体を整える力を身に付けさせることを目標としている。そのため、自分の考えが相手に分かりやすく伝わるように表現を整える過程で、特に粘り強さを発揮させたいと考えた。また、文章の構成や表現の仕方について、今まで学習したことを生かして投書を書く活動の中で、自らの学習を調整できるようにしたいと考えた。
- ② 言語活動の工夫点  
投書を書かせる際、書いて完成ではなく、協働的な学びを通して自らの表現を見直し、学んだことを生かしてよりよい表現にしようとする過程を入れた。そうすることで、生徒が自らの学習を調整しながら表現を整える過程を見取り、評価につなげることができるようにした。
- ③ 実際の評価規準(主体的に学習に取り組む態度)  
進んで文章全体を整え、今までの学習を生かして自分の考えを投書に書こうとしている。
- ④ 授業における評価の実際  
実際に評価する場面では、表現を整えられたかどうかを見取るのではなく、自分の下書きを読み直して試行錯誤しながら表現を整えようとしているかどうかを見取り、生徒への指導を行って、学習の改善を促した。  
第2時では、グループで下書きを読み合い、わかりにくい部分について確認し合う活動を行った。生徒Yは、他生徒からのアドバイスを受け、具体的な体験を入れたり資料を適切に引用したりして、読み手に対する説得力を高めようとした。これらことから、「多様な読み手に自分の考えがわかりやすく伝わるよう、表現を検討している」状況(B)と判断した。また、特に丁寧に何度も検討しようとしている生徒については、「十分満足できる」状況(A)とした。

## 2 令和6年度の計画について

### (1) 各支部による研究について

- ① 研究の視点及び〔知識及び技能〕〔思考力、判断力、表現力等〕の領域については、各支部の生徒の実態や課題に応じて協議すること。例えば、全国学力・学習状況調査等の結果で、「話すこと・聞くこと」の領域に課題が見られる場合、支部で「話すこと・聞くこと」を研究領域として指定することも可能である。また、授業者の手立てについては、どの実践も必ず明確にすること。
- ② 研究を進めるにあたっては、授業に基づいた実践研究であることを認識すること。県大会の発表資料は、支部での研究を十分に反映させた具体的な内容になるよう検討すること。

### (2) 県研究協議会について(予定)

- ① 名称 令和6年度県中学校教育研究会県北大会
- ② 日時 令和6年10月4日(金)
- ③ 会場 福島市内各中学校(3校分散開催の予定)
- ④ 分科会 3分科会(発表担当支部)
  - ・第1分科会…1学年(発表:田村,北会津)
  - ・第2分科会…2学年(発表:安達,耶麻両沼)
  - ・第3分科会…3学年(発表:東西しらかわ,岩瀬)

#### ～参考文献～

文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』  
文部科学省(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校国語】』